The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞テインペーミン著『ビルマで何がおこったか』をめぐって
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1991, 1, p. 91-131
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99640
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

テインペーミン著『ビルマで何がおこったか』をめぐって

南　田　みどり

1. 『東より日出ずるが如く』とのかかわり

テインペーミンの長編小説『東より日出ずるが如く』[1] は、様々な角度からの検討が可能だが[2]、なかでもその時代設定には意味深いものがある。テインペーミン自身の各種の発言からは、背景となる時代を1936年、とりわけ38年から42年に設定した明確な理由はうかがえない。執筆動機は次のように述べられる。

「『東より日出ずるが如く』をなぜ書いたか。1936年から42年に起こったビルマ独立闘争の歴史と、その歴史の輝きの鍵である反植民地・民族団結を、最も広範な人民を包括する形で記録したかったので書いたのである。」[3]

そこでも彼は、1936年から42年のたたかいを記録したかったことを強調するだけで、この時期の持つ意味にはふれていない。『東より日出ずるが如く』にエレンブルグの『パリ陥落』がヒントを与えたことは、すでにあきらかにした。『東より日出ずるが如く』も、『パリ陥落』同様、ファシストの侵略に至るプロセスを背景に、来たるべき悲劇に向かってビルマがゆっくり歩んでいく様を語る。しかし、『東より日出ずるが如く』の背景の大半は、1938, 39年であった。そこではこの時期におこった反英反植民地大衆運動いわゆる1300年事件が詳述された。そして1300年事件を書くことは、テインペーミンの10余年来の念願であった。これらのことから、『東より日出ずるが如く』の時代設定にも『パリ陥落』からの直接の影響はなく、そのテーマも『パリ陥落』のように反ファシズムというよりむしろ、「独立と青春」といったものであるかに思われた。[4]

とはいうものの、作品の結末を42年に限定した強力な必然性が存在するのではないかという疑問は残る。というのは、もしテインペーミンが書きたかったもの

が1300年闘争の真実のみであれば、38, 39年の詳述で十分であろう。さらに解釈を広げて彼が独立闘争の輝きを描きたかったのであれば、少なくとも抗日闘争の勝利する45年で終えるのが妥当であろう。従ってテインペーミンには、1938年から42年という期間が、ある特別の意味を持っていたと考えられる。それが、『ビルマで何がおこったか』の中に見い出せるのである。

ノンフィクション英文小冊子『ビルマで何がおこったか』（What Happened in Burma,Kitabistan,Allahabad,1943）は、『東より日出ずるが如く』同様1938年から42年を背景とする。『ビルマで何がおこったか』によれば、38年から42年はファシストをビルマに引きこんだビルマ側の事情が潜伏する期間であった。同書は、1938, 39年の事件 —— 1300年事件とその挫折と、1942年の事件 —— 日本軍の侵略との因果関係を明きらかにするものであった。

1956年の著書『革命時代の政治体験』でも多少ふれるようにテインペーミンは、英領ビルマをファシストが短期かついとも容易に侵略できたビルマ側の要因を、ビルマ・マルクス主義者の未熟さに求めた。当時の進歩青年の大半は、1300年闘争を独立に持ちこめず英官憲に弾圧された原因が、武器を持たなかったためだと考え、武器を提供するものはたとえファシストであろうと手を結ぼうとした。[5] これらのことからテインペーミンが、1938年から42年をファシスト侵略の序曲と抗日の萌芽の内在する期間ととらえ、『東より日出ずるが如く』の時代設定の中に投映した可能性も考えられるのではなかろうか。

1938年から42年はいったんノンフィクションとして『ビルマで何がおこったか』で書かれ、10余年の後にフィクションとして『東より日出ずるが如く』で再生した。このように同じ時代設定を二ジャンルにわたって用いることは、テインペーミンの作品中例を見ない。この時期に対する彼の強い思いがうかがえる。今回の『ビルマで何がおこったか』の拙訳は、長編小説『東より日出ずるが如く』の時代設定の認識を深めることを目的とした作業である。執筆事情と若干の解説を加えて、『東より日出ずるが如く』の時代設定の意味を確認しておきたい。

2. 執筆と出版に至るまで

『ビルマで何がおこったか』の執筆から出版に至る経過は、テインペーミン自身によればおよそ次の通りである。[6]

日本軍政下のビルマにおける逃避行のはて、1942年7月19日彼は陸路国境を越えてインドに入った。インドで抗日活動に従事したいという希望は、当初イギリス当局にうけいれられず、彼は8月3日にデリーに送られ、パンジャブホテルに軟禁される。『ビルマで何がおこったか』はこの時書かれた。それはインド人にファシズムを過小評価せぬよう警告する目的を持っていた。外国にビルマの事態を説明せねばという使命感は、出版を念頭においた初の英文の筆をたじろがせなかった。

彼はそれについて次のように述べる。英文執筆に不安がなかったのは「作家生活を通じて私が、内容を第一義としてきたからである。内容を主、言葉や文体を従としてきたからである。私は正義の立場にあった。反ファシズム、人民解放の革命の側に。これが『ビルマで何がおこったか』の根幹である。その枝葉を描くにあたっては、私の確かな見聞や体験があった。それが私に自信を与えた。それに作家として私は、難解でなく平明に書くことを常に優先してきた。だから英語の語彙が豊富でなくとも心細くなかった。」[7]

執筆後彼は監視の目を逃れ、ビルマ人のキンゾー、ビルマ人歌手のドーラ・タンエーらの働くデリー市の全インドラジオ・ビルマ語部を訪れる。キンゾー夫妻に原稿の校閲を頼んだが、語法やつづりをわずかに訂正されるだけだったという。またドーラ・タンエーは彼を、当時来印していたエドガー・スノーにひきあわせた。原稿を読んだスノーは早速序文を書き、出版社に連絡して出版の手はずを整えた。

スノーはその序でインド人と英国人の双方に呼びかけている。前者には民族団結をめざすよう、後者には戦争に勝利するため植民地思想を捨て、インド人民指導者と交渉し、譲歩するよう説く。この路線によってこそ反ファシズム革命とインドの独立が成功すると主張して彼は、『ビルマで何がおこったか』から、ビルマ人民が大きな犠牲を払って得た教訓を学ぶよう勧めた。

この本は作者がインドでは無名だったにもかかわらず、スノーの序とタイムリーな内容のため話題を呼び、7000部出版された。また別の出版社からヒンディー、

ウルドゥー、グジャラート、中国各語版が出版され、その要訳もタス通信はじめ世界各地の特派員によって紹介されたという。

さらにスノーはテインペーミンを、インド共産党デリー市委員のサラ・グプタ（サラ・デヴィ）にひきあわせた。『ビルマで何がおこったか』は、インドにおけるテインペーミンの新たな活路をも開く作品となった。

ところでその出版を、テインペーミンは42年11月頃だというが[8]、現実には43年4月であった。出版が遅れた主な理由は、イギリス当局が出版をためらったからである。インドにおける出版の効果が肯定的に判断されてようやく、シムラに亡命していた植民地ビルマ政府が出版を認めたという[9]。

さて『パリ陥落』をテインペーミンが読んだのは、『ビルマで何がおこったか』執筆の３年後、45年８月のことであった。[10] たしかに『パリ陥落』は彼の執筆意欲をかきたてた。しかし『東より日出ずるが如く』の時代設定は、すでに『ビルマで何がおこったか』の中に存在していたといえはしまい。『ビルマで何がおこったか』執筆時に『東より日出ずるが如く』の構想がすでにあったかどうかはともかくとして。

3. 二種類の日本人

前述のとおり『ビルマで何がおこったか』は諸外国語に訳されたが、ビルマ語には訳されなかった。英語版すらビルマ国内では入手不可能である。テインペーミンはその回想で『ビルマで何がおこったか』出版に至る経過には比較的詳しくふれる。しかしその内容にはごく簡単にしかふれない。[11] 1944年にインドで同じように英語で執筆し、45年に早々とビルマでも翻訳出版された抗日戯曲「新しい時代はあける」[12] については、同じ自伝で10ページにわたってその内容を紹介する[13]にもかかわらずである。あたかも『ビルマで何がおこったか』の内容を現代ビルマで紹介することをためらう要素が存在するかのようである。

今回の拙訳はあくまで小説『東より日出ずるが如く』のさらなる理解のための作業であるが、そこに『ビルマで何がおこったか』の内容に関する問題点を少しばかり、『東より日出ずるが如く』の訳者なりに指摘しておくことは、『東より

日出ずるが如く』理解の妨げにはなるまいと考える。

『ビルマで何がおこったか』を構成する8章は、ビルマにおける日本侵略の目撃者である作者が、ビルマの教訓を語る資格を持つことを主張する第一章、日本の援助でビルマ独立を獲得することを目的に結成された人民革命党と「日本」の間にかわされた「約束」について語る第二章、日本による一方的「約束」違反を語る第三章、「約束」にもとづき「日本」の軍事訓練を国外で受けた青年を核とするビルマ独立軍の1942年前半における現況を語る第四章、日本軍の蛮行を語る第五章、それらに対するビルマ人の様々な反応を語る第六章、日本軍侵略直後のビルマ経済の混乱や破綻の状況を語る第七章、インド人英国人に訴える第八章から成る。

ここでは、本文に登場する日本ということばの意味を考えたい。日本に対応する語として頻度順には1. Japan 2. Jap 3. Nipponが使用されるが、それはここでの主要な問題ではない。問題とすべきは、ここに二種類の日本人が登場することである。前者は第三章、第五章、第七章で登場する日本人であり、後者は第二章に登場する日本人である。残る章は両者が混在している。テインペーミンならびに受難者であるビルマ民衆の眼には両者はひとまとまりをなし、日本側の記録では両者は区別して扱われる。

前者は1942年1月ビルマに侵略を開始した大日本帝国陸軍の第十五軍（軍司令官飯田祥二郎中将指揮下の第18師団、第55師団、第56師団)[14] の将兵である。

テインペーミンは41年12月からマンダレー陥落の42年5月1日まで、マンダレーを中心とする上ビルマで人民革命党の秘密活動に従事していた。ビルマ南部ならびにラングーンを中心とする下ビルマにおける日本軍に関する記述は、彼の直接の見聞ではない。通信手段のとだえた混乱の中で、人びとの口から口へと伝えられた情報、とりわけ人民革命党の組織網を伝わった情報によるものと考えられる。42年5月から6月下旬まで、彼は中部ビルマ各地を潜伏しつつ脱出の機をうかがった。従ってこの時期のそれらの地方に関する記述には、彼の直接の見聞も加えられる。歴史書等の記録とつきあわせれば、記述の不鮮明な部分も見い出せるとはいえ、潜伏中のテインペーミンの耳には、本文のような形で情報が伝わったものと考えられる。記述される事柄は、侵略直後様々なビルマ人の情報源から一作家

に伝わった情報のひとつの集成ととらえられよう。

伝聞や見聞の中の日本兵の姿の描写には、日本側の記録の中では見い出せない受難者の視点がある。日本兵の蛮行から日本の教育水準や経済水準を考察し、その文化度を推し測る視点も客観的である。これらがテインペーミンいうところの、侵略の第三段階[15]で「独立の約束」をふみにじったむき出しの侵略者たる日本人の姿であった。

4. 謀略機関の功罪

一方後者は、侵略の第一第二段階を担当した日本人である。彼らは日本の宣伝を流布してビルマ人の心を日本への期待で満たし、「独立の約束」を与えてビルマ人協力部隊を作り、日本軍の侵略の潤滑油となった。彼らは表面的には何からの生業を営みつつ「調査」に従事する、謀略のプロであった。早期には元海軍軍人国分正三らの海軍系の動きがある。1939年頃から彼らは我等ビルマ人協会反主流派[16]と親交を結び、「ビルマ施策大綱案」や「ビルマ独立計画書」などを作成していたという[17]。しかし国分はその活発な動きにより40年8月イギリスに逮捕され、日本に帰国した。

これとほぼ入れ違いに40年7月頃、陸軍参謀本部付鈴木敬司大佐が、日緬協会書記兼読売新聞記者南益世と称してラングーンに入った。その任務は南方問題の調査であったが、彼は9月に我等ビルマ人協会主流派のタキン・ミャ[18]らと接触し、独断でビルマ独立援助を約束する。さらにアウンサンとフラミャイン[19]が外国からの援助を求めて密出国したのを知ると、アモイに潜伏中の二人を収容させて日本に送った。

当初ビルマ謀略に反応を示さなかった陸軍も、1941年1月には謀略を認める方向に傾き、2月1日、大本営直属謀略機関南機関が生まれた。前述の国分からの「独立」案を継承した計画[20]が作成され、3月にはアウンサンが「三十人の志士」を選出し脱出させるため、ビルマに潜入する。脱出の完了した4月から7月まで、海南島で南機関による軍事訓練がおこなわれた。

12月8日の対英開戦後、第十五軍はバンコクに進駐したが、大本営は三十人の

志士のバンコク行きを禁じた。鈴木は独断で彼らをバンコクに送り、12月27日ビルマ独立軍を結成した。42年1月、第十五軍がビルマに侵入すると、独立軍もビルマに進撃した。飯田司令官は同月、ビルマ進撃の目的を独立援助だと宣言したが、2月には南方軍司令部より、将来ビルマに独立を与えるにしてもかいらい政権に過ぎぬことや、ビルマにおける現地資源の獲得と利用の徹底が示達される。ビルマ独立軍はこうした変化を知らず、進撃するさきざきに行政機関を作っていった。3月、ラングーンが占領され、軍政施行細則で独立は戦後に与えると定められた。十五軍司令部への鈴木の「抗議」は無視された。6月、軍政がスタートし、ビルマ独立軍の地方行政機関は解散令が出された。南機関は解散して鈴木は栄転した。これらが日本側の事情である。[21]

本文でテインペーミンが語る日本の「約束」は、これらの謀略活動とかかわるものであった。本文にあるとおり、テインペーミンは41年12月に人民革命党に入党した。日本を利用して独立を達成するといった甘い期待はごくわずかで、むしろ党の基盤を利用して反英反ファシズム両面での闘争の中で大衆を組織し、民族解放独立を達成するという空想めいた持論を実践するためであった。活動上の直接の上司である旧友チョーニェイン[22] の説得で、この党が「日本」から援助を受けていることも承知の上であった。

人民革命党について『ビルマ史200年辞典』には「1939年にビルマ独立のための地下革命組織として人民革命党を結成した。指導者はタキン・ミャである。1942年まで独自活動はなく、我等ビルマ人協会の活動に参加した」[23] と記されるのみで、日本との関係にはふれられない。

同党が創設されたという1939年は、前述の国分の我等ビルマ人協会反主流派への接近や、彼らの「ビルマ独立計画」作成と機を同じくする。しかし、主流派であるタキン・ミャやチョーニェインが国分の接触を受けたとは考え難い。一方、鈴木がタキン・ミャに会ったのは40年9月である。人民革命党の成立を1939年9月とするならば、南機関は同党の結成にはタッチしていないことになる。

では、本文で語られる人民革命党と「日本」との間に結ばれたという「協定」や、巨額の金をあやつって同党創設にかかわった「日本人」とは何だったのか。それらの解明は今後の課題である。ここでは、同党中間機関の小指導者だったテ

インペーミンには、それら諸々の事柄が本文にあるような形でしか伝わっていなかったと推測するにとどめたい。

ところで南機関の鈴木に関しては、その「横柄な奇人的性格」が軍の指揮系統にあわなかったことが彼に独断を助長したという指摘もあるが[24]、『ビルマで何がおこったか』でも鈴木独自の役割が考察されている。ここで語られる鈴木はビルマ王朝の血筋を語ってビルマ人のノスタルジーをかきたて、ビルマの迷信[25]を利用したビルマ名を名乗り、トリックの仕上げをしている。また、天皇がシュエーダゴンパゴダに寄進したと宣伝してビルマ人仏教徒の心をつかんでいる。これらの行為はビルマの民心を日本軍の侵略に有利に導いたことになる。

この鈴木の功罪に言及するだけでも、『ビルマで何がおこったか』はビルマ人の著作としてかなりユニークなものといえよう。なぜなら南機関や鈴木は「ビルマ独立に貢献した」ビルマ国軍の母体であるビルマ独立軍の生みの親だからである。ビルマ正史ではビルマ独立の「恩人」たる南機関と侵略者たる第十五軍の間に厳然とした境界線が引かれる。[26] 南機関と第十五軍を明確に区別する点で、ビルマ正史と日本の各種戦史が一致をみせるのは皮肉である。

ビルマ正史と日本側の戦史の見方はともかくとして、受難者であるビルマ民衆にしてみれば日本人はあくまで日本人であった。国分の工作も、鈴木の独断も、南機関の独走も、そしてその後の第十五軍のむき出しの蛮行も、混然一体をなしていた。とりわけこれら全体を日本軍の侵略のプロセスととらえたテインペーミンの耳には、大本営と南機関の不協和音も侵略序曲のみごとなハーモニーの中に霧散していったのである。

5. もうひとつの『ビルマで何がおこったか』

『東より日出ずるが如く』は通常の長編小説の3倍の長さを持つ。一方『ビルマで何がおこったか』は59ページの小冊子である。1938.39年を背景にした部分は、『東より日出ずるが如く』では三分の二以上を占め、『ビルマで何がおこったか』ではごくわずかである。『ビルマで何がおこったか』で1300年事件より侵略の叙述に重点がおかれたのは、それが外国人を対象とするためでもあった。反

対に『東より日出ずるが如く』で1300年事件が詳述されるのは、ファシスト侵略の誘因をなすものとしての事件の総括が、ビルマにとって必要だと考えられたからでもあろう。

『ビルマで何がおこったか』であからさまに語られる日本人の謀略は、『東より日出ずるが如く』では控え目にしか語られない。[27] しかし注意深く読めば、それは『ビルマで何がおこったか』の骨系を逸脱したものでないことが理解されるであろう。

当時の進歩青年の平均像を主人公ティントゥンに反映させ、彼の闘争体験や彼のかかわる様々な政治的人物の言動を通してテインペーミンは、当時のビルマの進歩的潮流の思想的到達度を明らかにする。そして彼らの発想の必然的帰結、対日協力という汚点にティントゥンも引き入れる。ティントゥンの入党した人民革命党は日本の援助を受けている。ティントゥンは日本軍の空輸援助物資を三日三晩待ち受けるが得られない。これが彼の心に日本への疑念を強める。彼はマンダレーから混乱のラングーンに下る道中、日本軍の蛮行を見聞し、ビルマ独立軍の旧友に会って日本軍と独立軍の葛藤を知る。これらの事柄からファシズムの嵐の中で彼に抗日を決意させて、テインペーミンはビルマの良心が依然健在であることをも示す。

「しかし現実には、あなたもぼくも含む我等ビルマ人協会と学生自治会が、ファシスト日本の早期侵入を幇助(ほうじょ)してるんです。一体どうしてこんなことになっちまったのか、それがわからないんですよ」[28] という、1942年ファシスト侵略直後のラングーンにおけるティントゥンの当惑と悲鳴にも似た叫びは、当時の心あるビルマ人の思いでもあった。

「どうしてこんなことになっちまったのか」という問いへの答を、テインペーミンは1938年から42年を背景としたこれら二作品の中で与えた。『東より日出ずるが如く』は、もうひとつの『ビルマで何がおこったか』であり、『ビルマで何がおこったか』がビルマで再版される日まで、それは二作分の重みを担わされたと考えられるのではあるまいか。これら二作に、抗日戯曲『新しい時代は明ける』、インド亡命から帰国までを回想した『戦時の旅人』[29] を加えた四作は、テインペーミンの反ファシズム四部作と呼ぶに値する作品といえよう。

注

1) 1953.6－57.10 月刊ミャワディ誌に連載され、1958年出版。同年度サーペーベイマン賞受賞。1988－89年、拙訳で上中下三巻が井村文化事業社より出版。

2) 拙稿「二人の青年像－テインペーミンの2長編に見る主人公描写」『大阪外国語大学学報44』1977
同「二つの大戦前夜－『東より陽出ずるが如く』への『パリ陥落』の影響について－」『第二次世界大戦とアジア社会の変容』大阪外国語大学アジア研究会 1986
同「『東より日出ずるが如く』における『デイヴィッド・コパフィールド』の影響について」『大阪外国語大学論集1 』1989

3) Thein Pe Myint:"Taikpwewin Samya"1968,Rangoon,P.39,1961年のサーペーベイマン賞受賞式における発言

4) 以上は拙稿「二つの大戦前夜…」で詳述した。

5) Thein Pe Myint:"Tawhlanyekala Naingnganye Atweacounmya"1956, Rangoon,P.37－38 なお、それによればこれら多数派の他、テインペーミンなど日英二つの敵と闘うことを主張する派、タキン・ソウなど英国と同盟してファシストと闘うことを主張する派があった。

6) Thein Pe Myint:"Sitatwin Khayidhe"1968,Rangoon,P.112－157 ならびに "Sapay Bawa Zatlanzoung"vol.3,1981,P.482－489 でふれられる。

7) Thein Pe Myint:"Sapay Bawa Zatlanzoung"P.484－485

8) Thein Pe Myint:"Sitatwin Khayidhe"P.157

9) Robert H.Taylor:"Marxism and Resistance in Wartime Burma 1942－1945, Thein Pe Myint'sWartime Traveller"1984,Ohio,P.76

10) Thein Pe Myint:"Sitatwin Khayidhe"P.394

11) Thein Pe Myint:"Sapay Bawa Zatlanzoung"P.489では『ビルマで何がおこったか』について「1300年事件からはじめた。英国の弾圧、ビルマ人の英国に対する怒り、日本のスパイたちが入ってきて、怒る人民にえさをまく、独立を約束する、志士アウンサンが日本へ行く、ビルマ独立軍を結成して進撃する、

日本が侵入してくると人民を弾圧する、祖国から搾取する、女性をレイプする、独立軍と日本に矛盾が生じる、多くのビルマ人が日本を憎みだすなどを、体験的に書いた」と述べるだけである。なお、これが述べられる「自伝3」は1981年、テインペーミンの死後（1978年1月15日死亡）出版された。死の10日前のインタビューで彼は、自伝3が出版を許可されなかったと述べているので、それは遅くとも77年には執筆されていた筈である。出版が許可されたのはおそらく、検閲にひっかかった部分が削除されたためだと考えられる。

12）拙訳「戯曲テインペーミン『新しい時代があける』をめぐって」『現代アジア社会の研究』大阪外国語大学アジア研究会、1982参照

13）Thein Pe Myint:“Sapay Bawa Zatlanzoung”P.491－501

14）太田常蔵『ビルマにおける日本軍政史の研究』吉川弘文館、1967、P.5－15によれば当時本文のタボイ、モールメン、メイティラなどで見られたのは第55師団であり、プローム、ヒンダダ、ラングーン、イエナンヂャウンでは第33師団、マンダレーでは第18師団、アキャブでは第55のちに第33師団、タウングーでは第56、第18師団などが駐屯、通過している。

15）本文第一章冒頭を参照

16）同協会は1930年設立、1938年7月分裂。反主流派はタキン・バセイン、タキン・トゥンオウら。主流派にはマルクス主義を信奉する者が多く、問題の人民革命党も主流派から派生している。

17）太田：前掲書 P.39

18）（1900－47），34年我等ビルマ人協会加入。ビルマ農民協会議長、人民革命党指導者、日本かいらい政権副総理。戦後アウンサンと共に暗殺された。

19）アウンサン（1915－47）は38年我等ビルマ人協会加入。ビルマ防衛軍司令官、反ファシスト人民自由連盟総裁。イギリスと独立交渉期間中に暗殺された。
フラミャイン（ボウ・ヤンアウン）（1920－67）は、人民革命党を経て三十人志士となり、戦後派共産軍に加わって粛清された。

20）太田：前掲書 P.341によれば南機関の独立政策の元となった国分案はつぎのとおりである。本文中の「協定文」と対照されたい。
（a）ビルマ民族の独立自決を根本方針とする。

(b) 民衆を指導するに足る志操高邁なる人物を厳選し、将来大東亜の共栄を分担すべき同胞として教導する。

(c) 独立運動を一致して進めるため、各党派を大同団結させ、日本指導の下に統一化し、新たに親日政府を組織せしめる。

(d) 民族主義者の反英行動援助のため、日本は武器弾薬等を供与する。

(e) 機を見て日本軍をビルマに進め、積極的に独立を援助する。ただし征服するというがごとき感を抱かしめざるよう戒心しなければならない。

(f) ビルマがイギリスの羈絆を破却して独立を宣言すると同時に、日本は全幅的に支持する旨を声明して、大東亜共栄圏百年の基盤を据える。

21) 南機関の性格等については以下の資料が参考となった。

斎藤照子「開戦期における対ビルマ工作機関－南機関再考」『日本軍政とアジアの民族運動』アジア経済研究所, 1983

ジョイス・C・レブラ『東南アジアの解放と日本の遺産』秀英書房, 1981、第三章ビルマの独立義勇軍

22) (1915－86), 全ビルマ学生連盟指導者、人民革命党創設者の1人。日本かいらい政権議会秘書官、戦後ビルマ社会党書記長、副総理。

チョーニェインとのかかわりを回想したテインペーミンの「チョーニェイン」("Kyaw Nyein"1961,Rangoon) P.27－50でも、人民革命党入党の事情や活動についてふれられる。

23) Sein Myint:"Hnit Hnaya Myanmar Naingngan Thamaing Abeikdan" 1969,Rangoon,P.227

24) レブラ：前掲書 P.76

25) 例えば、「ボウボウアウン伝説」では、かってビルマ王に対抗した超能力者ボウボウアウンにちなんで、超能力者があらわれビルマが解放されると信じる者が1940年前後に少なからずいた。また、「天竺おしどり池に降り、それを狩人弓で射る、狩人傘の軸当たり、傘の軸に落雷す」といった歌が流行したが、天竺おしどりはモン族、池はアヴァ朝、狩人はコンバウン朝始祖、傘の軸が英国、雷が鈴木大佐と解釈され、日本が英国からビルマを救う予言としてもてはやされた。

26) 1981年、ビルマ政府は鈴木未亡人はじめ7名の元南機関員に、ビルマ独立功労者に授与される「アウンサン勲章」を与えた。一方日本軍の侵略は一貫して厳しく糾弾されている。

27) 日本軍謀略機関とのつながりをにおわせる謎の中年男タキン・ティンヂー、地域の人びとの好む落兆(狂人や童子のうたう歌で乱世に流行) などの親日的解釈、人民革命党の諸活動などに散見される。

28) テインペーミン『東より日出ずるが如く』下巻P.329

29) 月刊シュマワ誌に1950.10 −52.8「戦時の旅人」として、1953.2−55.5「連合軍とビルマの使節」として連載し、1966年『戦時の旅人』として一冊にまとめて出版された。

テインペーミン著

『ビルマでなにがおこったか』

―最近ビルマからインドに亡命した若き革命指導者の率直な告白―

著書前書き

英語出版物に執筆を余儀なくされたのは、これが初めてです。私には事実があるのみで、それらを飾る美辞麗句はありません。けれども、「鋭い槍は磨く必要なし」という格言が私の試みに勇気を与えました。

なお、明白な理由から、詳細な説明や名称の一部ならびに情報源については、意図的に省略しました。

1942年9月20日　テインペー ≪1949年9月よりテインペーミンを名乗る≫

目　次

第一章　信任状 …… 106
第二章　日本の約束 …… 106
第三章　約束の日本流果たし方 …… 109
第四章　ビルマ独立軍 …… 112
第五章　ジャングルの掟 …… 117
第六章　ビルマ人の反応 …… 123
第七章　日本侵略の結果経済は？…… 126
第八章　ビルマからのメッセージ …… 129

翻訳文について

1.＜　＞内は作者による注である。

2.（　）「　」は原文のままである。

3.原文のイタリック体は・・・・をつけてあらわした。

4.原文のポイントの小さい活字はそれにならった。

5.訳注はできるだけ少なくし、ビルマ固有のものを中心に《　》内に入れた。

第一章　信任状

ビルマ人は、日本の侵略の全段階を味わうという未曽有の体験をした。すなわち、最初にたっぷり約束をちりばめた日本のプロパガンダがきた。次にきたのは、日本の説得工作だった。それは侵略者に汚らわしい協力をする住民部隊を生み出すものだった。そして最後に、日本ファシストの軍国主義下厳しい受難が訪れた。

そこで、あるビルマ人がビルマと日本のこのかかわりから何らかの結論に達し、それについて見解を述べる場合、そこには科学的理論としての普遍性が認められよう。つまりそれは、実践的応用を前提に受容されるに値するであろう。そしてこの私自身が、確かな証言者としての資格を持っている。

第一に私は、秘密組織人民革命党上ビルマ支部の指導者として、直接事実を知っている。同党は、日本のビルマ侵略時、住民に積極的協力をさせるための部を設置していた。第二に、日本軍がわが国を完全に制圧後、私は地下潜行を余儀なくされ、二ヶ月余日本の支配を体験した。私は国内各地をまわり、流言でなく信頼できる情報を提供する友人に恵まれた。私は、ファシスト枢軸勢力の一掃がビルマ不可避の任務だとわが党に一貫して説いて以来、日本のゲシュタポにマークされ、地下潜行を余儀なくされていた。

さて自己紹介はこれくらいで、わが党と日本の秘された関係を語るとしよう。

第二章　日本の約束

1938－39年のビルマの大衆運動を、英国が警棒による殴打や銃撃で弾圧すると、ビルマ人ナショナリストに反動の嵐が訪れた。運動の挫折後、インド共産党の助言にもかかわらず、多くのビルマ人ナショナリストが、ビルマの日本特務機関の援助の申し出に応じることにした。日本人のささやくくどき文句に、ビルマ独立の夢をかきたてられたのである。賢明にも日本人は、きたるべきビルマ侵略に際して、ナショナリストの力を動員するまさに絶好の機会をとらえたのだ。しかし、日本とナショナリスト両者の間で、協定が一定の形をとるには、なおしばしの期間を要した。英独開戦後、彼らは協定に着手した。だがそれは、紳士協定だった。

次のような考察が、両者に影響して両者を協定に至らせた。

(a) 日本人専門家の間でも、対英戦でかなりの戦績をおさめるのは容易でないという見解がある。例えば、香港、マラヤ、東インド諸島の制圧は何ヶ月も要すると考えられた。その結果、ビルマは日本軍の戦略の第一段階から除外された。

(b) タイは民主主義陣営に投ずると考えられた。

(c) 日本軍部指導者にとって唯一の真に緊急の関心事は、中緬公路(ビルマ・ルート)の封鎖であった。

以下が協定文である。

(a) 日本の援助を受けるにやぶさかでないナショナリスト諸派は、合同秘密組織人民革命党(N. R. P.)に統合されるものとする。

(b) 人民革命党は、ビルマ独立軍(B. I. A.)と命名されるべき軍隊を編成する。それはまず、タイのビルマ人、シャン人居住地数ヶ所で編成し、次にビルマ独立軍と日本の援軍の合同部隊がテナセリム《ビルマ最南端の地方》を制圧した時点で、同地で編成する。ビルマ独立軍は党最高会議の全面的な指導下にあるが、最高指令官は日本人とする。「日本人最高指令官は、訓練されたいかなるビルマ人よりも軍事に通暁している」からである。常駐日本人顧問が各連隊に配属されるものとする。

(c) 人民革命党はビルマ全地域で反乱を組織する。決起は、ビルマ独立軍がテナセリムから北上する時期に呼応する。ビルマ独立軍は、日本(ジャップ)から空輸援助物資を受領する。日本陸海軍は、独自に中緬公路(ビルマ・ルート)占拠にかかわる。ビルマ独立軍と反乱者を装備するすべての武器と物資は、ミカド陛下から支給される。

(d) ミカドの政府はすみやかにビルマの独立を承認する。

(e) 戦争中日本帝国軍隊は、前線が侵されぬようビルマを守る。

(f) テナセリム制圧後ただちに、人民革命党最高会議選出メンバーによる臨時政府を組閣する。

(g) 以上の好誼のみかえりに日本が要求するのは、商業上の優先権と中緬公路(ビルマ・ルート)統制権のみである。

これらは、日本ファシストが器用にもて遊ぶ誘惑の手だった。ビルマ人ナショナリストは、盲目的な恋におちた。当初は私も、進歩反動を問わずナショナリストが、祖国独立に執着する余り、国際的な同盟の力関係をいかに見落としていたにしても、あんな協定に魅力や希望は見い出すまいと思っていた。

だから、ビルマ人ナショナリストが、見事な誤用名を持つかの党への入党にかりたてられたのは、政治的背信行為でなく、ひとえに政治的未熟さと素人っぽさのゆえであった。多少の学生たちと、ほとんどの（全員ではない）タキンたち（我等ビルマ人協会（タキン党）のメンバー）が入党した。変節社会主義者のバモー博士（1893－1977、元弁護士。42年8月ビルマ中央行政府長官）もさっそく合流した。日本の申し出で、日本帝国予算と別枠に2億ルピーがビルマ再建資金として党の裁量に任された。

その間もビルマの日本特務機関は、ビルマの新しい友人を釣り上げる手を一刻も止めなかった。それは、冒険主義者で前首相で被拘留者ウー・ソー（1901－48、41年日本との通報嫌疑でエジプトで逮捕。ウガンダに抑留）の提案からも明らかである。

党最高機関は32名のビルマ人愛国者を選出し、日本人の手で密出国させた。彼らは、ビルマ独立軍将校となって反乱を指揮すべく、日本と台湾で軍事訓練を受けた。

日本のビルマ侵略直前の二年間は、人民革命党の陰謀活動とそれに対する警察の処罰や予防措置が渦巻いていた。党内には毛色や信念の異なる人々が増加し、イデオロギー的無政府状態が各級機関に浸透した。一部の血気にはやる社会主義者は、党の資金と武器を流用して「帝国主義戦争を内戦へ」という彼らの方針を実践するという思いあがった計画で入党した。

1941年12月までは、私は事実上人民革命党員ではなかった。しかし同月、私は人民革命党最高会議から上ビルマの指導者に任命された。社会主義者たちの誤まった計画にいくらかの共感がなかったわけではない。人民革命党と日本（ジャップ）の密約にかすかな希望がなかったわけではない。ただしそれはほんのかすかなものだった。ただ、断乎たる思いはあった。それは、大衆からは孤立すべきでないし、嵐の海の船の如き大衆には、親ファシズムの嵐がおさまり始めた時に船を舵取りして望む方向へ向きを変えられる船長が必要だという思いであった。非合法のパンフや、秘密のあるいは公開の集会で、私は反英路線を主張した。私はイギリス帝国主義との協同戦線を非難したが、同時に日本への疑惑をも表明した。客観的には、私が演じたのは左翼偏向の役割だった。

当時ファシストの民族論は、独立を望むかなりのビルマ人に浸透していた。狂心的愛国主義は、ビルマ王や王朝始祖の記憶を民衆の心によびさました。不覚に

もビルマ人は、「我等アジア人」「我等仏教徒」「共栄」等々の日本のスローガンの網にとらえられ出した。人々は、アジア人で仏教徒の日本人が同じアジアの地である中国で、情容赦なく血なまぐさい略奪皆殺し戦争を展開してきたことを忘れはじめた。

一方イギリス帝国主義は、ビルマにおいて三面で闘いを展開していた。彼らは当然ながら親日派を憎み、独立を願う中立派をあからさまに軽蔑し、共産主義者を愚かにも信用していなかった。彼らが闘っていた三陣営には、ビルマのすべての良心がつらなっていた。そこには、大多数の幸せを願う心も、献身をいとわぬ意志も、闘う勇気もあった。だから、英国がビルマで聖なる反ファシスト人民戦争を共に闘う相手として残されたのは、あらゆる種類の金目当てのおべっか使いだけだった。

その結果は？結果は常に敵の思うツボだった。吐き気をもよおすような敵のプロパガンダも、大衆には絶対真理としてうけいれられた。党支部が雨後のたけのこのようにあらわれた。イギリス宗主権が依然存在していた期間中さえ、ビルマ独立軍新兵徴募がおおっぴらに始まった。ファシスト勢力が人民戦争の組織化に成功するさまを目撃したまじめな反ファシスト主義者の苦悶は類例をみない。ただし、現状が進行すれば、インドもまた同じ憂き目をみぬ保障はあるまい。

第三章　約束の日本流果たし方

それにしても一体日本は、ビルマへの約束をどのように果たしたか？日本は典型的ファシストの流義でそれを果たした。

ミカド陛下からの約束の武器は全く届かなかった。反乱組織者たちの待機は徒労に終った。ビルマ人は竹槍と槍と山刀で決起せよというのが東京の指令だったのだ。だが遺憾ながらビルマ人は、それをするには用心深すぎた。彼らの多くが、日本の約束と意図を疑いはじめた。遅きに失したとはいえ、日本が武器を送ってこなかった理由を彼らが認識するに至ったのはよかった。ファシストは、武装すればビルマ人反乱者が自分たちの支配を脱すると思ったのだ。それに敵が意外にもろかったので、彼らは次第にビルマ人の協力が不要になりはじめてもいた。さ

らに日本(ジャップ)は、もはや人民革命党の利用価値がないという結論に至っていたのかもしれなかった。

日本人は、当初ライフル千丁とピストル百丁をビルマ独立軍に与えた他は、武器を支給しなかった。ビルマ独立軍がかなり膨張し、捕獲武器や資材で自衛せざるを得なかったにもかかわらずだ。帝国予算の配分では、哀れなビルマはその千分の二も受け取らなかった。

ビルマ独立軍は協定に忠実に、日本人最高指令官南大佐別名雷将軍(ボウ・モウデョウ)（ビルマの封建時代の栄光と流行中の迷信にちなんだ名）の指揮下に入ったが、協定の条項に反してそのご仁は党の最高機関から完全に独立していた。むしろ党からものをくすねていたのである。

日本軍は全土を侵略した。将兵は本性をあらわし、レイプや略奪や殺りくに走った。しかも、東条閣下が貴重な同盟者で協力者だと鳴り物入りで公式に承認した国に対してである。後のページで私は語ることにする。銃剣から逃れられない父親の面前で、日本兵が少女をレイプしたことを。干草の山をかきまわして日本兵が民衆の金(ゴールド)を探したことを。ニッポンポリスに、炎天下焦げつく砂中半ば生き埋めにされた男が盲目になったことを。

「ただちに」認められるべき独立について、日本軍国主義者は前任者の言い草を踏襲した。「今は独立は無理だ。終戦後のしかるべき時にだ」と。1942年6月3日、ビルマの日本帝国軍最高指令官がメィミョ《東部のシャン高原の避暑地。会談は実は6月2日》の官邸で政治指導者の協議を招集した。最高指令官飯田陸軍中将は特に語った。「日本政府はビルマの独立に関する首相東条大将の約束《41年1月21日の国会における声明》を取り消さない。＜この約束はシンガポール陥落祝宴の時くりかえされた。＞しかし戦争中にそれを許可することは無理であり、考えられない。君たちの運命は日本の勝利にかかっている。戦勝の後にビルマは独立を達成する。長期戦にそなえ、ビルマは国の全資源を動員すべきである。この戦争を妨害したり戦争協力を拒否するものは、何びとたりとも軍による容赦ない処置を受ける。」これは腹蔵のない発言であり、談話はビルマの全新聞に掲載された。

その席上中将は、「共栄」国家臣民の線に沿ったビルマの政治的発展と完全独立のための計画のアウトラインを示した。独立への道には四段階あった。第一段

階は中央行政府設立準備委員会。第二段階は、戦争中日本軍政に協力する協力委員会。第三段階は、機能のあいまいなタイムリミットなしの行政委員会。第四段階は臨時政府。そのあと、悲願である祝福すべき独立がおとずれる。鉄道、税、通貨はむこう15年日本の専有項目となる。政体作成の複雑な実務でかくも博学の支配者たることを、彼らは誰におそわったのか。私には見当もつかない。この計画は公表されなかった。それは指導者のみを対象としていた。不安定で流動的なもの――世論は、そのような計画をうけいれるに不向きだというのである！

協議後にただちに、飯田陸軍中将の「強権」発動で準備委員会が設立された（42年6月3日）。奢侈好みのバモー博士が委員長に就任する運びとなった。タキン指導者4名、バモーの腰巾着2名、カレン族指導者1名、前大臣1名がメンバーに名をつらねた。委員会に言及した文言は次のとおりである。

(1) 委員会は、日本軍政との十分な協力を保証するビルマ統治計画を準備する。

(2) 委員会は、日本ビルマ両国民の友好を妨げない政体を準備する。

委員会は、（ビルマの日本帝国軍）最高指令官に計画を提出して承認を求めることを必要とされた。

私は委員会の作業の終了をビルマで待つことができなかった。しかし、最近のビルマでの「新政府」発足は《42年8月ビルマ中央行政府設置》、あきらかに委員会の作業の賜物である。東京放送は以下のようなニュースを伝えた。

「新政府は日本軍政と協力して行動する。そして、最高権力は日本人最高指令官に与えられる。」（読者諸氏には、この人物をビルマ独立軍最高指令官南大佐こと雷将軍（ボウ・モウザョウ）と混同されぬよう注意申し上げる。）「政府はまた、日本軍政と衝突の可能性のある政策を避ける。政府会計やその他の特別重要問題は、日本軍政が取り扱う……日本（ニッポン）政府はこの戦争に獅子奮迅の努力を払っている……ビルマ人は日本の戦争を自らの戦争と考えるようにならねばならない」などなど。

今や大多数のビルマ人ナショナリストは、希望が粉々に砕けるのを目撃しているに違いない。山のような希望が、微塵の砂や埃と化した。当然ながら多数が、英国と日本の政策の差を見抜けなかった。彼らは日本の政策の平明な語り口を理解したが、きらびやかな語りや格調高い句で頻繁に修飾される英国のジグザグ論議には、何らの意味を認めることができなかった。

たとえあるビルマ人が、日本は英国以上のものをくれないとはっきり悟るに至ったとしても、彼が耐え忍ぶ相手としては日本を選んだであろう。日本人はアジア人で仏教徒を自認しており、とにかく目新らしかったからである。それが大衆の心理であり、とりわけビルマ人の心理であった。もし大英帝国がビルマ人の積極的支持を望むならば、彼らのイマジネーションをとらえなければなるまい。ビルマに対する古びた政策や意図に固執する限り、英国は手痛い目にあうであろう。

第四章　ビルマ独立軍

ビルマ人はいまや、かの英国統治時代とは別人になった。第二次大戦のこの激動の中で、彼らは苦労と精励のくらしになじむようになった。彼らはもはや、のんきに笑ってばかりいる民族ではない。彼らは自分の軍隊を持っている。そこにいるのは、彼ら自身の親類知己である。そしてそれはビルマの独立を十分保証する。* そこにはいまや、世界の全反動勢力と対決する一群の若きリーダーがいる。彼らはいまや、英帝国主義や日本ファシズムとのかかわりで政治経験を蓄積し、自らの失敗や経験や学習から生まれた正しい理論で武装されている。ゆえに国連がビルマを、第五列だとか、連合側が確実に成功した暁に方向転換を図る日和見主義者とみなし、あたかもビルマ人が考慮に値せぬかのようなビルマキャンペーンを計画することはもはや許されない。＜*重要な注：この章を書いてから私は、日本がビルマ独立軍を解体し、かわってビルマ防衛軍を編成した《42年7月》ことを知った。その員数は大幅に削減され、日本将校の厳格な指揮下におかれている！当然ながら彼らは、独立を願う真のナショナリストを憎悪するにちがいない。＞

ビルマ独立軍は新しい軍隊である。それは最初、日本で軍事訓練を受けた32名のビルマ青年ナショナリストによってタイで結成された。それはまず、タイ在住のビルマ人とシャン人により編成され、次にタイビルマ国境を越えたタボイ《テナセリム地方の町。42年1月19日占領》の住民多数が加わった。至急速成訓練がなされ、彼らは日本からライフル千丁とピストル百丁を受け取った。それは創始財として貢献した。

その後の戦役で、日本人はビルマ独立軍を警戒するようになった。モールメン

《ビルマ第三の都市。42年1月31日占領》では、日本軍とビルマ独立軍の間に小ぜりあいがあった。しかしそれは友好的に落着した。その後の戦役で、ビルマ独立軍と日本ジャップの本格的覇権争いが激化した。

戦役の当初、ビルマ独立軍の員数は多くなかった。（民衆の大半は親日ではなかった。あえて親なにがしというならば、親ビルマであった。日本の侵略者が受けたと解され、おおいに宣伝された住民の支援にしても、ビルマ独立軍が受けたものにすぎない。）しかし、英国の敗北でビルマ独立軍は急成長した。それは強烈な親日の表出でなくむしろ、ビルマナショナリズムの闘争的表現だった。そしてまたそれは、英国の崩壊で生じた空白を埋めるために独立ビルマ行政の施行をめざす最初の試みだった。（日本軍がこれをどのように妨害したか、第三章と五章を見られたし。）

かくして日本軍との間に争いが生じた。アラカン地方《ビルマ西端。現バングラデシュとの境界付近》では、この二つの侵略者の――ビルマ独立軍をそう呼んでよいのならの話だが――興味深い争いと、その当然の帰結である衝突が目撃された。日本の連隊とビルマ独立軍の連隊が、タウンゴウ峠経由でアキャブ《アラカン第一の都市。42年5月4日占領》に向かった。ビルマ独立軍の連隊は徹夜で、二度の食事をぬいて青草を食べて行進し、日本軍より時間をかせいだ。ビルマ独立軍は日本軍より一日早くアキャブに到着し、240万ルピーを含む戦利品を捕獲した。それが、対立する二連隊の争いの種だったのだが。ビルマ独立軍の指揮官がそれを引き渡したという話は聞いていない。

日本軍には機械化部隊が、つまりトラックや発動機船があった。おかげで彼らは《プローム42年4月2日占領》とピンマナー《42年4月20日占領。共にラングーン・マンダレー間にある》でビルマ独立軍を追い越した。以後日本軍は、撤退する中国・英国勢を追って楽々と国内を急進し、ビルマ独立軍は取り残された。しかしビルマ独立軍はビルマ最北端めざし行軍を続けた。独立軍将校の中には、行軍がいかなる軍にも最善の軍事教育だと説明する者もいた。ビルマ独立軍は行軍につれてふくれあがり、新しい駐屯地に着くごとにその装備も完備されていった。各町に独立軍本部ができた。それは新兵募集と法・秩序の遵守に全力を注いだ。入隊希望が殺到した。食料武器の支給もままならぬおそれが生じ、ビルマ独立軍最高司令部は各地区の

募集人員を制限せざるを得なかった。独立軍の武器は、トムソン式小型機関銃多数とわずかのブレン機関銃、そして、戦場から拾ってきたレンガであった。

兵士の大半が若い学生やタキンで、労働者階級や農民はわずかだった。兵士の大半が、日本は自分たちを裏切らないと信じていた。そしてその圧倒的多数が心からひたすら祖国を思い、祖国の解放を認めぬ者は何びとたりとも許さぬ覚悟であった。5月に私は幾人かの兵士にたずねた。必ず独立できると思うかと。彼らのほとんどが答えた。「まあ、試験を受けて、結果待ちってところですね」と。

彼らは無給であった。彼らは田舎で生活し、多くの場合民衆から食物の施しを受けた。そうした仕事の達人たる比丘(ポンデー)が、食糧とカンパを集めてビルマ独立軍を支援した。実は、ビルマ独立軍のための食糧集めは英国撤退以前から始まっていた。残念ながら上ビルマでは、独立軍のために集めた米や油や塩など食糧の大半が、日本の空爆《42年4月3日マンダレー空襲》でだめになったが。

ビルマ独立軍の連隊に「炊事場(ケッチン)」はない。行軍中あらかじめ宣伝要員を次の宿営地に派遣し、食べ物を調達させるのだ。彼はその地域の戸数に応じ、連隊を「食事班」に分ける。各家庭は一「食事班」に最大限のもてなしをする。とはいえ家庭があまりにも貧しい場合、食糧を買う金が与えられた。

だが一定期間連隊がひとつの場所に駐屯する場合は、別の方法がとられた。住民が食事供給グループを作り、交替で部隊に食事を用意するのだ。それは、1938—39年にストライキ中の学生や労働者が受けた支援の方法をほうふつとさせた。

兵士の大半にとって、民衆の施す類の食物を常食するのは犠牲的行為であった。元学生の一兵士は、皿が足りず紙に盛られたその日の朝食《基本的には二回食なので昼食に相当。裕福な家庭は品数も多い》である唯一の料理、ごはんと野菜カレーをちょっと食べながら、しみじみ私に言ったものだ。「先生(サヤー)、ぼくがこんな食事や生活をするところを見れば、親は泣くでしょうね。」私は彼をなだめた。「まあ、人生の苦労を勉強したまえ。そしてご両親に、きみがひとまわり大きくなったってことを証明するんだね。」

ビルマ独立軍の軍紀はまだ統一されず、各連隊が独自の掟を守っている。しかしすべての連隊長がその統一をめざしていた。そしてそのための動きがすでに始まっていた。エドガー・スノーの「中国の赤い星」を読み、中国の紅軍に心酔す

る者もいれば、日本での訓練に大きく影響された者もいた。（ついでながら蒋総統は日本で若干の軍事訓練を受けている。）私と親密なビルマ独立軍参謀二名は、英国の軍事科学について高度な理論的知識を持ち、学生訓練軍団《39年結成。独立にむけ武装訓練をする組織鋼鉄隊。責任者トゥンシェインことヤンナイン》では勇名を馳せていた。以上三潮流のいずれに軍配があがるのかわからないが、私としてはそれらの合成が進むことを切望する。

わが国民についての私の経験によれば、彼らは有事にみまわれない限りいつも規律性を欠く。彼らが現状を有事と認識するのはよいことである。時として兵士たちは、途方もないほど規律を守る。ある村で農民たちが私にこぼした愚痴を思い出すと、顔がほころんでしまう。彼らの雄牛をビルマ独立軍兵士が虐待したというのだ。彼らは15マイルもの間一度も休まず、一気に雄牛を駆ることを強いられた。しかも炎天下である。兵士の言い分では、敵がどこにいるかわからないので、目的地まで行軍中いかなる場所でもいかなる理由であれ止まるべからずと上官に命令されたのだという。私は農民に、兵士たちの行動がなぜまちがっていないか説明しなければならなかった。

シュエーダウン《マンダレー南の町。42年3月末激戦》のある場所に、北上する全車輛を止めるためビルマ独立軍の監視所が置かれた。その時すでに全英国勢は、その地域を撤退したとみられていた。「我等ビルマ！」《独立軍派の挨拶や合言葉のようなものになっていた》を叫ぶ乗組員の乗った戦車が一台疾走してきた。見張りの一人が手をふって停止を命じた。弾丸が彼の胸を貫き、戦車は走り去った。ビルマ独立軍に戦車がなく、戦車乗組員もなく、敵が長期間独立軍のスローガンを利用し続けていたことなど、この男の極端な訓練感覚では思いも及ばなかったのであろう。

私の夜間逃避行の護衛をつとめた二名の兵士を思うと、感謝と愛情に加えて同情をもよおす。私の同行者にひとりの比丘がいた。目的地に着くと、私は元に戻らず比丘だけその夜のうちに戻ることになった。私は兵士に比丘の護衛を頼んだ。彼らはそれを拒んだ。「上官からはあなたの護衛に全身全霊をささげよと命じられましたから、あなたを残して行けません。」彼らの気持には感謝するが、その分別は歓迎すべからざるものであった。

モンユワ《マンダレー北東。42年5月3日占領》ではヤンナイン連隊《ボウ・ヤンナイン、本

名トゥンシェイン、1918生れ。学生指導者をへて密出国。後にビルマ防衛軍指揮官》の兵士二名が、混血中国人から150 ルピー収賄のかどで処刑された。みんながこの処罰は厳しすぎると思った。とりわけ故人の出身地タボイの兵隊はそうだった。しかし抗議はおこらなかった。マグエー《イラワジ東岸の上ビルマ水陸要所》では、武装強盗団から金装飾品を捕獲する命を受けたある中尉が、任務を遂行したまではよかったが、一部を着服した。マグエーの指揮官は司令部の承認を得て彼を銃殺した。

連隊長の大半は、到着したさきざきで、兵士の不品行を報告するよう人々に注意した。なかには売春も罪だとする者もいた。だがそこは大目に見る者もいた。ただレイプの話だけは聞いたことがない。近頃では独立軍兵隊はかつてのI. C. S.《インド文官。秀才青年の憧れであった》さながら、結婚市場で引く手あまたである。

富裕層にはビルマ独立軍は貧しい階層ほどの人気はない。彼らが車や家や連発ピストルを頻繁に要求するからである。ビルマの富裕層はだいたいにおいてウー・ソーの国家政府党《愛国党》員や旧時代の官僚である。彼らは自己保全にこれつとめる、最も犠牲的でない階層であり、その頭にあることといえば自己の繁栄のみである。彼らはいまや、植民地的策略を心得て彼らを歓迎する日本側に走った。なるほどサー・スタフォード・クリップス《1889－1952、社会主義者を名乗る英閣僚経験者》やJ. B. プリーストリー《1894－1984、英国の小説家、批評家、劇作家》は、確かに大英帝国が変わったという。だが仮りに、この戦争をきりぬけた英国がかつて同様の帝国主義的政策や策略を持つ大英帝国を復活させ、再びビルマを支配したとしよう。その暁にはかのビルマの多年生寄生階層は、ビルマ独立軍による無惨なしうちや、日本ファシズムと呼ばれたかの憎むべき政権についての、吐き気をもよおすような思い出話を語って、支配者のおひきたてにあずかることであろう。

ビルマ独立軍は武装強盗団の鎮圧でも、古来のビルマ的方法を手本にした。ならず者の大半は、乱世にあって自然かつ無邪気に武装強盗団に加わったのであった。ビルマ独立軍は彼らのうち札つき多数を公開処刑した。一般にそれらの罪人は、銃剣突撃用の練習台に利用された。一方ある連隊長は、非暴力的処遇に才能を発揮した。彼らを労働集団に編成し、人間を改造したのである。彼らに信頼に値する状態があらわれると、彼らは武器の使用訓練を受けた。武装強盗団が自分の強奪した財を差し出してビルマ独立軍に投降するケースも多かった。財は所有

者に返却された。所有者の申し出がなければ、独立軍がそれらを没収した。

ビルマ独立軍の良心的な部分は、人々の愛と賞讃をしっかり獲得した。しかし例外的存在があるのも人の世のならいである。それらの部分は増長しがちであった。出世しか眼中にない者たち、見栄で武器を扱いたがる者たち、我らが旧議員殿のように挫折感と不満を持つ公人たち、失業書記、ならず者などの面々である。彼らはみんな、それぞれの思わくからビルマ独立軍に賭けていた。ならず者たちは、酒や売春婦の世話をして日本将校からかわいがられていた。なかでも日本のスパイや、謀略機関の挑発者がこっそり独立軍に潜入した。それらのものたちがすべて、過度の「軍」用物資調達をやってのけた。鶏や卵やバナナを調達する巡回官吏団、賄賂や汚職で音にきこえた「調査委員会」が、彼らの手で再び制定されている。

もちろん、これらすべての望ましからざる部分に独立軍将校が無頓着であるわけではない。彼らは軍からならず者を粛清する道を歩み出した。私が独立軍将校との若干の接触で受けた印象からいえば、彼らが取る立場の如何にかかわらず、彼らの熱望や献身がビルマ独立軍を人民の軍隊に育ててきたと思う。ビルマ国外の人々は、それを真の人民の軍隊とは認め難いであろう。それが、現在に至るまでファシストに利用されているからである。これは最大の悲劇である。これに匹敵するものといえば、ラーマに不貞を告発されたシータの悲劇のみであろう。さて、真実はシータのみぞ知るというところであるが。

第五章　ジャングルの掟

パンディット・ジャワハルラル・ネルーがかつて言った。「ファシズムの支配するところジャングルの掟がものを言う」と。私はビルマで日本人と遭遇するまで、彼のことばの真実と含蓄を十分認識していたわけではなかった。ごく最近まで私は、ジャングルの掟が人間社会を牛耳ることなど一体あり得るのかと思っていた。いくらその支配がひどくて残酷だったにせよである。たとえば、象が果実を食べるために木を打ち倒すことなどあるのかとひとりごちたものである。

ところが、日本人はそんな象と大差なかった。実を取るためにココ椰子を切り

倒したのだから。（このことは現実に、アキャブ近くのオンドーや下ビルマの多数の地域でもおこった。）彼らは道中出合った家畜を撃ち、ももだけ持ち去って残りの部位は腐乱にまかせた。（私はその行為をシュエーボウ《マンダレーの西北》のズィーゴン付近で見た。）

日本兵は民衆の承諾があろうとなかろうと台所に入り、塩や魚や気に入ったものを何でも持ち去る。目に入ったものがあたかも彼らの祖先の持ち物ででもあるかのように。多くの場合日本兵は、店に入ると金も払わず欲しいものを持ち去る。戦争で荒廃したビルマに現在立派な商店街（バザール）はない。破壊をまぬがれた唯一の場であるスラムに、みすぼらしい商品をならべた小さな小さな店が開かれている。我々の町の商店街（バザール）は、現在どうみてもせいぜい村の定期市にしか見えぬ代物だ。そんな商店街（バザール）も、しばしば日本人に急襲される。それが日本人の買い物光景なのだ。例えばマンダレーのゼーヂョウ・バザールは今やなく、マハームニパゴダ南西に代替の青空市場が再開した。日本兵がそこのお得意客である。彼らは定価通り支払わず、店主が売るのを拒むとびんたを張る。彼らはいつもただで品物を手に入れようとする。

ヒンダダ《ラングーン・プロームのおよそ中間にある》では、ひとりの兵が値切りを拒んだ女店主を殴打した。日本政府が彼らに米と砂糖しか支給しないから、こんな食料調達法となるのだ。きまぐれか、処置を誤ったかはともかくとして、日本人が我々の家具を燃料に使うのを見た時はショックだった。タンタピンでは、彼らは僧院（ポンヂーチャウン）に宿営していた。寺は軍用道路から少し離れていた。別のさらに不運な比丘たちが、三蔵などの入った仏教聖典庫を保存するためその寺に運びこんだ。宿営者たちは、その書庫をこわしてたきぎにした。ラングーンでは、日本兵はラングーン大学学生自治会読書室の床で料理した。床は木張りである。彼らは本を燃料にしたという。多くの場所で日本人は、木の壁や窓枠を火力に転じるというすばらしい科学的才能を示した。

日本兵がしばしばたんつぼや室内便器で食事をする光景は、ビルマ各地でお決まりの笑い草となっている。これは、彼らが水で洗えば万能だと固く信じているか、適材適所にものを用いるセンスが欠けているかのいずれかであろう。彼らは米を深鍋かブリキ缶で炊く。そのかゆ鍋に、彼らは入手したものをことごとくぶ

ちこむ。塩、椰子砂糖、玉ねぎ、鶏肉、牛肉、豚肉、魚醤、バナナ等々。野菜油やバターは、彼らが控えているので入れない。

彼らは死体に群がる禿鷹のように略奪にふける。禿鷹との差は、その対象が食べられるものとは限らないことだ。彼らは金やお金が大好きである。シュエーボウの村々で、私は彼らが金目のものを求めて家から家へ押し入るところを目にした。彼らは、時計や皿や銀製品やぞうりを持ち去った。と言うより盗んだと言おうか。金やお金が家の中に見あたらないと、彼らは干草の山をすき返す。当時の農民は干草に虎の子を隠す習性があった。これを日本軍はかぎつけ、手に入れたのだ。

親日派だった友人の一人は、日本兵を自宅に残して将校の道案内に出た。帰宅すると兵隊は去ったあとで、釘にかけていたシャツのポケットの67ルピーも万年筆も金の飾りボタンもきれいになくなり、家中がかきまわされていた。友人はこの話を私にした後、うってかわって快活に言った。「U.S.A.が東京など数市を爆撃したぞ。U.S.A.の空の要塞がやってのけたんだ。すてきだろう！」

私の友人の家からほど遠からぬところで日本軍は、500個の米袋を真中から裂き、米の中に金やお金がないか探した。チャウセー《マンダレーの東南》には、獣の日本軍に最悪の略奪をされたピンダレーという村がある。彼らは約2万ルピー相当の貴金属を持ち去った。彼らはくつに隠した指輪まで見つけ、土に埋めたものを全部掘り出すよう身ぶりで（ことばを知らないので）村人に命じるという徹底ぶりだった。

彼らの帯びた特命の中でも最も悪質な部類に属するのは、家中の衣服にインクその他の着色料を浴びせ、ラジオをバラバラにしたことであろう。これをどう説明すればよいのか？田舎では、予備の雄牛二頭を後につけた牛車を日本軍が駆る光景がよく見られた。それらは農民から強奪したものだった。シュエーボウで私の知るケースでは、日本の野獣を恐れて家畜は森に隠し、牛車はばらされた。おかげで時すでに農繁期であったのに、農民は仕事に着手できなかった。

チャウトゥインでは、日本兵数名が地方行政機関に金の無心にやってきた。彼らは10ルピーをせしめて布を買おうとした。しかしその額では足りないのを知り、さらに金を無心した。拒まれると彼らは隣村から馬を一頭盗み、2ルピーで売っ

て差額にあてた。チャウセーで日本人は村人から盗んだ牛車を、別の村で彼に卵をくれた人間にやった。地方行政機関は牛車を元の持ち主に戻さねばならなかった。

日本軍は、鉄道をシュエーボウ北部まで修復していた。彼らは木材の使用を欲しいままにし、持ち主のビルマ人数名は全く支払いを受けなかった。チャウセーでは日本軍は、橋をつくるためある家の柱を切り取り、家はトランプの家のように大地に崩れ落ちた。日本軍はある家に強引に泊りこみ、ひどく暑く風通しが悪いので、風を入れるため間仕切りを移動した。こうした気味悪く癖のある悪行から判断するに、彼らがノーマルな人間だとは何びとも認めまい。そして、日本では万人が読み書きできるという話は大ぼらか、それともその読み書き能力とやらが無駄としか呼べぬほどの代物であるか、どちらかに違いない。

我々の比丘たちは、日本人の暴虐の最大の犠牲者であった。ズィーゴンでは比丘たちが日本軍から、マンゴーに登って馬にやる枝を切り落せと命じられた。比丘に木登りするよう説得するなど、私には至難のわざであるが。チャウセーのミングン寺院では比丘たちが、日本軍に衣服の洗濯と水汲みをさせられた。黄色の僧衣でズボンを作った者も多い。僧院は常に、日本の略奪計画の頂点に位置していた。

周知のことながらインドでもビルマでも、裸体をさらすのは文化的生活態度とはみなされない。《ビルマ人は水浴も着衣のまま。》多数の裸の日本人を町で見かけたビルマ人は、虫酸が走り憤慨した。メイティラ《マンダレー南方。42年4月20日占領》では、有名な湖で日本兵が裸で水浴しているところへ、女行商人が通りかかった。一人の兵士が素裸で水から出て、その女に止まれと叫んだ。

彼は彼女の売り物である食物を買おうとしたらしい。彼女は裸の兵士を見ると、一目散に逃げ出した。彼は2本の美しい足をあらわにしたまま彼女を追った。この見世物は、女が自分の商品盤を投げ捨て、横町へ逃げこんで幕となった。さらにメイティラでは、これら汚らわしい害虫が湖にかかる橋の近くの人目につく所で、彼らの陰毛をそるところが目撃されている。

これら侵略者の大半がノートを所持し、そこには生かじりのビルマ語についての知識が書かれていた。最初の文はたいてい「日本はビルマの独立のためにたた

かっている」であり、二番目の有名な文は「このあたりに若くてかわいい娘はいるか」であった。彼らはビルマ人を見れば必ず自分の胸を軽くたたいて「Za-pan」と言い、次にビルマ人を指して「Biruma」と言うのだった。それら音声表現の後、その獣は映像芸術でいうところの顔面ならびに身体表現に移行する。彼は両手を握りしめ、微笑というより歯をむき出して笑う。これは、我々はみんな友達だという意味である。それからまさしくこの時、かの有名な第二の文が、顔面ならびに身体表現と共に発されるというわけだ。

マンダレーではある日本中尉が、私の友人に二日間女を借りたいと求めてきた。彼は、従わなければ殺すとおどした。タウングー《ラングーン・マンダレー間の町。42年3月30日占領》では、臨時行政委員会の数名のメンバーが日本軍に、女の子を世話するよう頼まれた。ある委員は不運にも、自分の娘が求められた。（日本軍は彼女が彼の娘だとは知らなかったと想定しておくが。）結局その委員は辞職し、即刻姿を消した。こういった例は各地で枚挙にいとまがない。

けれども銃剣の威嚇下でのレイプと比べれば、女の要求などまだ耐えられる。ピンマナーでは、レイプ中の日本兵ジャップ数名をビルマ独立軍が殺害した。シュエーボウでは、レイプを計画中の兵士たちを村人が山刀で襲った。あるとき、数名の村人が怒りとしゅう恥に赤面してビルマ独立軍の露営地になだれこんだ。「村の娘っ子が2人日本軍ジャップにレイプされた。おれたちの持ちものを取られても我慢はできる。だけどあれだけはだめだ。あんたがたに乗り出してもらいたい。さもないとおれたちが手持ちの武器で日本軍を殺る。結果がどうなろうとな。」ビルマ独立軍将校はこう言って一同の怒りを鎮めた。「そのうち仇を撃ってやる。だが今はだめだ。」

チャウセーでは、ピンダレー村の娘が一日で5名もレイプされた。一人の兵が15才の少女にその非人間的犯行に及んでいる間、待機部隊が銃剣をぎらつかせて、抗議する父母をおさえつける役目を担当した。これら身の毛もよだつ犯行が終了すると、野獣たちは12才の少女を肩にかついでら致した。しかし少女はうまく逃走した。未確認情報であるが、ファシストギャングが露営地に戻った時、何者かが茂みの陰から彼らの一人を撃ち殺したという。

しかし多くの場合、このやくざどもは罰されないままだった。時宜を得た天罰

が下らんことを！

さる独立軍将校たちが、日本軍将校に抗議をこころみたこともある。彼らは無神経にもそれを一笑にふし、有無を言わせずこうのたもうたのだった。「友よ、我々は我が国で君を歓待した。君はすべてを手に入れた。女も含めてね。今度は君たちが厚意を示してくれる番じゃないか。気にしない気にしない。まあ一杯いこう。つまるところすべての女は男のためにあるのさ！」

なんと、これが公式的見解であるとは！というより国家的見解というべきか。日本では女は所持品であり、せいぜい雌としての扱いしか受けない。日本の少女が年頃になると、彼女の父か男性後見人が工場か売春宿へ行って、少女の長期雇用契約にサインする。父親たちが娘を売春宿に売った帰り、その金で別の売春宿に一泊するといった話は、アサヒのような新聞によくのっている。

このような女性観を持っているので、日本人略奪団は我々の姉妹にどのような犯罪も犯す。田舎では、日本人の居住地付近の女たちは、常に家畜と一緒にジャングルに避難するか、男装する。日本女性は、地下活動に加わって現体制を転覆する矣兵となるべきである。なぜなら彼女たちは最大の受難者だからである。そして同様の理由から、私は東洋の女たちが我が反日キャンペーンの主力となることを提唱したい。

日本人の汚らわしい特質は、彼らが実施する刑罰の方法にもあらわれている。「男根刑」ともいうべき事例をあげよう。あるビルマ人が、まったく不用意に日本軍用電話線をいじっているところを見つけられた。兵士たちはこの哀れな男のペニスに電線を巻きつけ、彼を感電させた。シリアム（ラングーン東方、精油所がある）では、若いタキンがパンフを配っていて逮捕された。それは日本軍政の視点で見れば、好ましからざる内容のものだった。その若者は炎天下、足を砂地深く埋められて立たされた。哀れな彼の目は見えなくなり、体はまひしてしまった。

こうした非人道性を露骨に見せながらも、日本人は自分たちが他のいかなる民族よりも優秀だと思っている。あらゆる日本人が――兵卒から将軍まで、三井のコックから資本家までが人種的尊大さを見せつけてくれる。ビルマでの見聞から私は、日本政府が国民を次のように教育してきたにちがいないと結論づけた。つまり、侵略した国の人々はすべて目下であり、奴隷となるべく定められていると

みなせという教育だ。

日本人とたまたま遭遇した身なりのよい上流ビルマ人の多くが、苦役を命じられて当惑と屈辱を覚えた。彼らが屈辱的労働を拒むと、びんたが張られた。日本のびんたは英国の握手のような習慣であるという俗説が、通用しつつある。

自らをアジア解放の守護者と命名し、共栄の推進者、東洋文化の先駆者をもって任じる者たちが現在展開するこれらすべての蛮行——略奪、殺人、レイプ、わいせつ行為にみる獣性、悪質ないたずら——を読めば、我らが指導者ジャワハルラル・ネルーのかの現実的なことばを誰しも歓迎せざるを得ないだろう。「ファシズムの支配するところジャングルの掟がものをいう。」

第六章　ビルマ人の反応

これらあらゆる日本の暴虐に対するビルマ人の反応は、第一に当惑第二に絶望であった。声高に友好を叫びながら、なぜ日本が自分たちにあのような接し方をするのか理解に苦しんだからだ。それでも彼らは早晩、小国とファシストの関係にはぬきがたい矛盾がつきものであることを知るはずだ。そしてまた、ファシズムが小国の敵であることを感じとるはずである。

前述したビルマ独立軍と日本兵の日常的衝突やささいな口論のような矛盾は、あらゆる軍隊に常につきものであろう。それに付け加えるべきぬきがたい矛盾が、独立を望む小国と、その征服や略奪にふけって独立をつぶす勢力との相克だ。ビルマ人ナショナリスト——それを具現したものが独立軍だが——は、失った独立を回復しようという彼らの企てへの協力者として日本をうけいれた。しかるに日本はビルマを、侵略者に奴隷として与えられた国と常にみなしてきた。しかし日本は本心をもらさぬよう常に用心していた。ビルマ人の幻想を巧みに育てたのは、にぎやかな日本人宣伝者や魅惑的な外交官だった。例えばビルマ独立軍指導者のほとんどが今なお、南大佐（独立軍司令官）を善良な年長者だと思いこんでいる。ビルマ独立を熱心に主張し、日本軍は侵略者でなくビルマ独立の援助者だという見解を持って、日本軍政の説得に誠実に努める人物だと思いこんでいる。独立軍指導者の大半が、日本人顧問や南を自分たちの同情者で真の友人だと見ているが、

私は彼らを日本側の卑劣なスパイと見る。

雷将軍（南のビルマ名）は大衆に風変わりなトリックを使った。彼と独立軍顧問たちはビルマ名を持ち、ビルマ服を常着している。そして彼らの大半がビルマ人に見えた。雷将軍が長いロンヂーとビルマ帽で盛装すると、とても日本人とは思えないといわれた。そして雷将軍は、自分がミングン皇子《1843－1917頃、1866年クーデターに失敗してサイゴンに住んだ》の孫だという流言を作り出してふりまいた。ミングンはビルマ王朝最後から二代目のミンドン王《1814－78、名君の誉高い》の息子で、父王に反乱を企てたが失敗し、インドシナに亡命した皇子である。さら雷将軍は自分にちなんだ多数の迷信を作りあげた。これらのトリックのおかげで彼は大衆の心の中に一定の地位を獲得し、ファシスト日本への大衆の幻想が強まった。彼は、ビルマにおける日本の力を強めるのに仏教を利用している。全ビルマ仏教徒協会は彼によって作られた。日本の天皇はその活動に資金を提供した。天皇は南の勧めでシュエーダゴンパゴダに1万ルピーを寄進した。進歩的青年にはそのことは取るに足らないことだった。その下賜金は紙幣で、印刷通貨が乱発されていたからである。しかし大衆は、仏教徒の（と彼らは思った）天皇に支配されることに誇りを感じたであろう。雷将軍は彼の周辺に有力な比丘を集めた。彼らはビルマの仏法でなく日本の仏法を宣伝した。

日本当局は、この世で何よりも華やかさを愛する人々の好意をかちとった。彼らは十分な見せ場が与えられる限り、名ばかりの権力でもためらわず歓迎した。例えばタキン・トゥンオウ《1907－70、三十人の志士、42年3月行政組織長官》だ。政治的には道化役者、容貌的には映画俳優の彼は、しばしば公衆の面前に日本兵の従者をともなって姿をあらわした。それら兵士は日本憲兵隊長官の手の者だった。バモー博士は、ビルマ独裁者役を演じさせてもらっている。その弁舌と修辞を再生する機が与えられて彼は、もはやビルマにいない英国人を罵倒し、アジア人がアジアからヨーロッパ人やアメリカ人の駆逐に成功したことを祝福する。彼は、彼の主人の主人であるドイツ人がヨーロッパ人であることを忘れている。

すべての情報が国家統制を受けている。ビルマの全新聞に検閲がある。編集長たちは、日本で実行されているファシストのテロルを何かで読んで、それに呪縛されているらしい。我々の編集長の中にマハデヴ・デサイ《1892－1942、ガンジーを補

佐したジャーナリスト》のような傑物はいない。ゆえに新聞はどれもこれも、熱狂的にファシズムを支持している。

あらゆる政治記者が人々の反英感情をかきたて、あらゆる演説会で盲目的愛国主義が蔓延している。それは日本人がもたらす不快な現実から人心を遊離させる。

これらが、日本の権力を強化するためにビルマで作用している力である。それは、日本に対する大衆の幻想を育てる。それは、軍国主義者が犯した罪を隠ぺいする。

しかし、前述の矛盾は次第に進行するにちがいない。遅かれ早かれ、誠実な人間は誰でも矛盾にぶつかるようになるだろう。

ビルマ独立軍は独立再建の任を担い、日本軍を協力者の地位に押しのけ、全国のビルマ行政委員会を後押しして、国家権力の奪還に努めている。一方日本の将兵は、ビルマ人ナショナリストと日本の各種謀略機関との間でかわされた密約には全く無関心だ。彼らはファシスト的征服方式にしか慣れていないから、独立ビルマ行政委員会の機能が自分たちの手を離れるのが許せない。

ビルマ独立軍が日本軍に先着した下ビルマの独立ビルマ行政委員会は、日本軍が先着した上ビルマのそれより安定していた。ミンヂャン《チャウセーの西、42年4月30日占領》、シュエーボウ、チャウセーの事例では、日本の介入で委員会は解散させられ、日本が選出した者を含めて再編された。マンダレーでは独立軍の後押しする委員が免職となり、日本の任命で新委員会が発足した。ザガイン《マンダレー北西、丘陵に寺院が多い》では、独立軍は委員会が作れなかった。ザガインは、機会主義者たち（イギリス時代の官僚や自由主義的な政治家や富裕層をさし、戦火を逃れてザガインヒルに避難していた）の宗旨変えの好例を示してくれる。前大臣や前副領事や前郵政長官や前なにがしがこぞって昇る太陽の前にひれふし、ファシスト支持のおべっか使いになった。さっそく彼らはナショナリストに対抗し、日本のゲシュタポに協力して30名のナショナリストを検挙させた。ビルマ最初のニッポンポリス、日本ゲシュタポの結成は彼らに起因する。ザガインにヒントを得て日本軍国主義者は、各地にニッポンポリスを設置した。

ニッポンポリスはビルマ独立軍後援の委員会のいくつかの権限を奪い、しばしば多くの面で委員会を蹂躙した。多くの地方で委員会が武器の許可証を発行する

と、ニッポンポリスがそれを取り消した。彼らは武器の許可証は自分たちしか発行できないと主張した。ニッポンポリスは委員会に、税を徴集して寄附せよと命じた。そこで委員会は税を取りたてず、広く公に寄附をつのって日本の干渉を避けた。いくつかの地方では、ニッポンポリスが重要な全訴訟事件を自分たちに回すよう委員会に命じた。ヒンダダはじめいくつかの地方で、ニッポンポリスは委員会を説得して、彼らの選んだ人物を行政長官に任じさせた。チャウセーでニッポンポリスは、委員会があるにもかかわらずそれと別に、前科者の殺し屋を市の弁務官に任命した。

シュエーボウやザガインやチャウセーでニッポンポリスは、ビルマ独立軍地方支隊を武装解除した。これはナショナリストたちを仰天させ怒らせた。独立軍指導者が日本当局に抗議すると、答えはただ「心配無用」だった。各地の独立軍の熱血漢たちは、日本軍国主義者が誠実な全ナショナリストを武装解除する可能性があるという悲痛な認識に至った。マルクスの金言「きみたちの武器を捨てるな」を、彼らが忘れないでほしいものだ。

しかし注目すべきは、ビルマ独立軍の力が強いところでは日本軍人が態度にやや気を配るということだ。独立軍の砦の近くにいる日本将校は、部下をより厳しくしつける。例えばチャウセーの蛮行は、独立軍の連隊が到着すると完全にとだえた。そうした日本の蛮行を独立軍の兵士が実力で阻止したからである。二つのグループの武力衝突の原因は常に、日本側の不正にある。ここで一つの問いが生じる。日本ファシストはそうした衝突の回避を望んでいるのか？答えるのはまことにむずかしい。とりわけ日本軍（ジャップ）がビルマ独立軍にスパイ挑発者を潜入させ、これらスパイが表面上反日を装っていることもあるからだ。彼らが将来「一騒動」おこさないとは言えまい。

第七章　日本侵略の結果経済は？

ビルマはインフレその他の経済的要因でさらに苦しむだろう。

ビルマの（すなわち英国の）通貨の使用は無制限である。それに加えて日本政府は、10ルピー、5ルピー、8アンナ、4アンナ、10セント（6パイスに相当）、5

セント（3パイスに相当）《1アンナは16分の1ルピー、1パイスは4分の1アンナ》単位に紙幣を発行している。伝えられるところでは日本人は、銅貨を含む4アンナならびにそれ以下相当の硬貨を握っているらしい。彼らの紙幣にはアラビア数字はなく、二文字（例えばM. N.）があるだけだ。この事実はまさに凶兆である。紙幣発行へのしかるべきコントロールはないらしい。私には方法を説明しにくいが、日本軍（ジャップ）がビルマで通り相場をあやつり、金を詐取していることは断言できる。生産が低下して物価が上昇し、通貨が流通しすぎるとインフレになると私は理解するが、今やそれがビルマに到来したと考える。

ビルマの物価高は3つの要因による。すなわち(a) 国内の輸送機関の崩壊、(b) 生産の全面的混乱とほぼ全部門の停止、(c) 日本を含むすべての国からの輸入の停止である。

(a) ビルマではほぼすべての近代的輸送手段が停止している。重要な橋の修復も、日本人の手に余っている。機関車はすべて破壊され、日本は軍用のみに機関車を運び入れている。内陸汽船はすべて英国がイラワジ川に廃棄し、日本は新品が持ちこめていない。軍用さえ日本は、ほぼ装甲された発動機船しか使っていない。自動車に乗れるのは日本人と独立軍だけだ。乗り合いバスはわずかにあちこち走っているが、石油価格ははね上がり、バス代が日本時代前の10倍になっている。（村人たちはイエナンヂャウン油田《マグエー北方にある最大の油田、42年4月17日占領》とシリアム精油所を結ぶパイプラインを切断し、原油を採っている。今や彼らは古来地酒造りに用いていた独自の方法を開発して原油を精製できる。その手造りオイルが1ガロン12ルピーで、バスやトラックに用いられている。）郵便サービスはいまだ回復せず、電報電話は軍用のみである。バモー博士のかいらい政府がビルマの通商を改善するに際し、交通通信の常態への回復が最も厳しい仕事となろう。内政の貧弱さはさておくとしてもだ。

(b) ビルマは産業の貧弱な国だ。往時も全産業が英国やインドや中国人資本家によって出資され、操業されていた。そして彼ら全員がビルマを出た。英国人資本家は、過去百年間我が国では育くんだものをすべて破壊した。油田地帯とシリアム精油所はひどく荒廃し、悲惨な光景を呈している。それは英国の怒りと決意と、そしてファシストの野望の挫折を象徴する。私は、破壊編隊がタイエッミョ

のセメント工場で完璧な仕事をやってのけたのを知っているが、同様のことがシャン州の鉱山やその他の英国産業になされたはずだと推測する。生まれたばかりの綿産業と化学産業（主として石けんと化粧関係に限られるが）が蕾のうちに摘み取られた。イエナンヂャウンの油田を除いて、日本はそれら「焦土」再建の意志をあきらかにしていない。油田では、半裸の汗まみれの日本人が必死に破片を片付けたり、眼鏡をかけた工兵隊将校がどこから再建に手をつけるべきか途方にくれる光景が見られる。中空の櫓がそれを取りまく様は、失意の図以外の何ものでもない。

いくつかの地方で農業が混乱している。危機に頻した大衆の精神不安定や惑乱、水路管理の混乱、日本兵の愚行、これらすべてが正常な農業の手順を妨げている。しかし私はこのことで、次年度のビルマの食糧不足を予言するつもりはない。その地方には余剰米がある。しかし輸送の崩壊や通商の混乱で、米価は1942年7月のラングーンでは1袋40ルピーにもはね上がった。1941年12月に16から18ルピーだったものがだ。そして同様の理由から、数地域で局地的欠乏がある。

(c) 輸入商品はすべて品切れである。以前はありふれていた日本製品までが、まだビルマに入っていない。日本のラングーン制圧この方、ビルマ人は日本から消費材がどっさり届くのを心待ちにしている。これまでのところ日本は、ビルマで入手できるものは手工業製品に至るまで持ち去った。かくして彼らは、ゼヤワディ地域から3万袋の砂糖を船積みした。おそらく日本向けと思われる。ソファや長椅子などの高級家具は日本兵に没収され、東京へ船積みされている。その使途は説明し難い。最近の空の勇者ゼネラル・カトーは、アキャブ地元の長老たちにカーキー生地を調達するよう要求した。あきらかに制服用である。世界に名だたるコットン生産国が、その卓越した空の勇者にカーキー生地すら支給できないとは！なぜ日本は輸出品が送れないのか？それは軍需品に集中するため日用消費材の生産を停止したからか、または日本に商船の護衛艦も満足にないからか、そのどちらかである。

石けん1個（サンライトのタイプ）が1ルピーする。マッチ1箱が4.5 アンナ、針1本が2ルピー、ロンヂー用コットンが1枚6ルピー（以前はせいぜい1.5 ルピー）、1ビス《3.65ポンド》の灯油が2ルピー等々。すべて法外な高値で、すべてが近い将来

底をつくだろう。

人々は古い昔に戻った。蒸気船や発動機船にかわって、ボートや筏が多くの川をゆったり流れている。牛車の列が道路や小径をのろのろ進む。（ただし日本の徴発の可能性の少ない場所と時を選んでだが。）大きなはしけは最も一般的な交通手段だ。ビルマ人は原始的な火おこしを復活させた。つまり2個の小石を打つのである。灯油にかわって桐油のような原油や野菜油がお目見えした。マハトマ・ガンディーなら糸車（チャーカ）の復興を見て喜ぶだろう。それは実に長い間ビルマ人が忘れていたものだ。しかし私にとっては、これらすべてが時代の期待を裏切るものだ。それは科学的到達の抹消であり、我々の技術的発展の頓座であり、つまるところ世界の進歩に逆行するものである。スターリンがこの戦争を進歩の戦争と分析するにもかかわらず、仮りに誰かがこれは退歩の戦争だと主張すれば、ビルマは後者を支持するだろう。

しかし、歴史的状況が完全独立を与える方向に展開することを確信するに足る根拠を、ビルマは持っている。ビルマは、イーデン外相の二原則がその国境内で有効であると信じている。その原則とは第一に、いかなる国も経済的援助を受けることでその独立を喪失するものではない。第二に、自活する技術の未発達な国に与えるいかなる援助形態も、その国自身の発展を助ける類のものでなければならないというものだ。もしそうであれば、ビルマのすべての男女の生活状態を改善し、繁栄させるために、この戦争で失われたものは埋めあわされて余りあろうし、国の資源は十分開発されるであろう。それゆえ、ビルマの進歩的な世論は、世界の進歩勢力を大胆に支持している。彼らは人類の進歩が絶対確実であることを知っている。

第八章　ビルマからのメッセージ

けれどもとりわけ世界中の誠意ある人々がビルマから一、二の教訓を引き出しさえすれば、それだけでビルマは現在の苦しみや喪失が十分報われたと感じるであろう。

エーメリー氏（1873－1955、英政治家、ジャーナリスト）が本当に誠実ならば、彼に不

満な人々を背後にかかえたままファシズムと戦争する危険性を認識すべきであろう。彼はまた、久しく独立を失い現在も独立を謳歌できない人々の不満が妄想でなく本物だということも知るべきである。将来における独立の約束は、来世における至福といった宗教的色彩をおびる。いかに仰々しく正式に認められようとも、そのような約束は大衆を崇高な行動にかりたてはしない。エーメリー氏とその取り巻きは、不満の声が単に不満分子のリーダーたちの創造の産物であり、大衆は移り気でトップのリーダーの発する標語やスローガンでどんなふうにでもたやすくあやつられると考えている。つまりエーメリー商会は、大衆の役割、人民の不屈の役割を認めようとしない。彼らは今なお、人民戦争をためらっている。彼らは依然として、総力戦の遂行というファシスト的方法を信じている。しかしその方法を有利に展開するには遅きに失している。ここに彼らの誤算がある。済んだことはさておき、いずれ彼らも全戦線における真の人民戦争こそがファシストの総力戦に有効な唯一の挑戦だと認めねばなるまい。

人民の抑圧は国内の平和を導くかもしれない。しかしその平和は危険をはらんだものであり、人民はぞっとするような声で不満を叫んでいる。

逆にガンディー氏は、ファシスト野獣どものどう猛さや腹黒さを過小評価する危険性を認識すべきである。彼らはあなた自身の同意をとりつけ、あなた自身の非暴力教義をたてに、あなたの首ねっこを押さえる力を持っている。だから、東京と和平会談を持つというマハトマの実現不可能な夢は、国連にインドの意志への疑いと悪感情を植えつけるだけである。

インドの全ナショナリストがビルマから学ぶべきは、ナショナリズムを熱心に追求し実践する余り、国際的な解放闘争全体が視野に入らなくなる時、その献身者たちをより厳しい隷属と災難が見舞う可能性があり、現にしばしば見舞ってもいるということだ。インド人の心に日本かドイツに対して何らかの好意があるとしたら、ただちにそれを捨てたまえ。もしインド人が英国の約束を信じないなら、どうして枢軸の約束など信じられよう。それこそこの世で最も信用できないものなのだ。

もし英国がインド人の期待に十分応えられないなら、インドにおける英国居留民とその既得権の運命は、ビルマの油田のそれ同様になりかねない。しかし手遅

れになる前に英国がインドの期待に十分応え、独立インド国民政府の誕生を援助するならファシズムへの勝利は保証され、インドにおけるその利害は守られるであろう。国連の勝利は、独立インドが外国人や外国の権益の排斥につとめるファシスト・インドとなることを許すまい。ゆえに英国は、インド反動家と手を組み士爵(ナイト)や太守(ナワーブ)のような反民族的部分から利益を得るのをやめねばならない。

そしてインド人資本家は、ファシズムの意味をしっかり理解すべきであろう。ファシズムは資本主義の新種である。それは国内の社会矛盾も国外との政治的経済的矛盾も解決できず、通常の平和的手段で通商や生産に成功を収められなくなり、狂暴な手段に逆行して国際的無頼漢となりはて、軍事的征服や略奪にふける。彼らのやり方では、あなた方の資源が開発できないばかりではない。あなた方が既に蓄積したものも、彼らの貧しい母国へ持ち去られるだろう。満州でやられたように、あなた方の中には日本兵に誘かいされる者も出て、将校たちがあなたの一族から金を巻きあげるかもしれない。

そしてすべての労働者農民諸君は、日本やドイツが極めて新しい資本主義的搾取方法を採用していて、労働や収穫によい賃金や価格を支払わないことを知るべきであろう。彼らの方法が要求するのは、人民がその生活水準を全面的に下げることなのだ。

ゆえに誠実な全インド人が、まずこの反ファシスト戦争を自分自身の戦争ととらえねばならないのは火を見るより明らかだ。すべてのインド人は、ファシスト略奪国がインドの地に手を出せないよう警戒し、彼らにファシストお決まりの恐るべき犯罪を犯す機会を与えず、彼らを地球上から一掃せねばならない。イギリス帝国主義やエーメリーがどうであれ、インド人がインド防衛のイニシアチブを握らねばならない。それは非協力や、暴力と放火の醜悪劇以上に、インドが生得権や独立を獲得するための重圧を英国や国連諸国民にかけるだろう。あなた方のイニシアチブでファシズム撲滅をたたかいつつ、力を結集しよう。そうすれば、ファシズム絶滅がチャーチルやエーメリーの悲願の賜物だなどと取り沙汰されずに、インドの独立をもたらす力が育つだろう。

さて兄弟よ、これがビルマからのメッセージだ。ビルマは十分苦しんだ。『ビルマで何がおこったか』が、インド人の祖国への正しい決断の助けとならんことを！